

里の虫鈴

松川村で夢の実現

松川村のとうふ屋で有名な甲斐沢さんは、村議会議員であり、さらに「村おこしこぶし会」の会長さんでもある。村おこしこぶし会というのは、松川村のテレフォンカードをつくらしたり、石碑建立するなど、すべて村おこしの一環として活動を行っている会のことだ。はじめは23人であった会

も今では甲斐沢さん1人だという。それでもなお、村内の宅配など活動は行っていて、鈴虫に関わって、有名になり村に鈴虫保護条令ができて、一つの村おこしになったという。そんな甲斐沢さんが鈴虫を飼いだしたのは28歳のときだった。散髪に行つたときに鳴き声がかとも



鈴虫と、甲斐沢さん。村議会議員であり、「村おこしこぶし会」の会長さんでもある。

松川村リンゴ産業

松川村はリンゴ栽培の適地で、昭和15年にリンゴの木を植えるはじめ、現在では農家は、約50軒ま



松川村で作られた赤いりんご

る。収穫したリンゴは、自家販売や直売所、市場に出荷し、消費者に売られている。収穫時、傷んだリンゴはリンゴジュース

育苗は春先に植えて2年か3年で実ができる。小さい木は、30年〜40年、大きい木は、約100年が寿命である。育てていく中で、自然被害(ひょう、台風、し

も)により、出荷量が減るため対策を考えなければならぬことがリンゴ農家にとって一番大変なことである。リンゴの摘花作業は多くの労働力が必要で、毎年ボランティア活動で松川中学校の生徒に手伝ってもらってこつても助かっており、うれしいと松川村リンゴ部会長平林昌彦さんは語った。

松川村でぶどう狩り



たくさん実をつけたぶどう。戸谷勝次さんは、松川村にある「夢ふぁーむ」でぶどうや、ブルーベリーを栽培している。昭和46年から栽培を続けているが、松川村でぶどうを栽培しているのは、現在こ

栽培しているのは、巨峰を中心としたぶどうとブルーベリーで、巨峰の栽培はぶどうの中でも難しいという。ぶどうを収穫する時期は、秋の9月から10月だ。「たくさんの子供たち

いちご産業



実が付き始めたイチゴの花。赤く色づいたころに収穫を迎える。

かぼちゃやま農園では、イチゴ産業に取り組んでいて、平成7年にイチゴを定植し、現在では松川村で有名なイチゴ農家になっている。イチゴは、一本の苗から約3パック収穫できるそう。収穫したイチゴの夏イチゴは中京方面で販売されており、促成イチゴは北安曇郡のスーパーや直売所で販売されている。夏イチゴは4月に定植を行い、6月下旬〜12月まで収穫する。一方、促成イチゴは9月に定植し、12月の中旬〜6月まで収穫できる。収穫目標は、促成イチゴは2万5千本で、夏イチゴは7千本を作ることだそう。育ていく

松川産の桃



桃の栽培をする柳本弘人さん。

松川村川西地区、柳本弘人さんのお宅では15年前から桃の栽培をしている。松川村では桃の産地化が進められ、今では2・4ヘクタールになっている。その中、柳本さんのお宅は13アールをしめている。桃の木は水を嫌うため水はけのよい地での栽培が必要になる。10年ほどで枯れてしまい、特に害虫の問題が大変になっているそう。雪のあるうちから作業を始めていき、早いものだと7月下旬から収穫だと言ふ。桃にもたくさん種類があり、柳本さん宅では7種類も栽培している。それぞれ収穫時期は違ふけれど、田植えと重なってしまう時期が1番大変だ。そのような過程を経た桃は直売所や大北農協へと運ばれていく。大北農協では光センサーに通され、糖度も知る事ができる。

私達が夏場によく食べている桃は北陸までにも渡っていつている。柳本さんは、「この状態を維持しながらも、産地化を進めたい」と語った。